

「個別最適な学び」をどう捉えるか—「主体的・対話的で深い学び」の実現へ—

京都大学大学院教育学研究科准教授 石井 英真

石井 英真 (いしい てるまさ)

日本学術振興会特別研究員(PD)、京都大学大学院教育学研究科助教、神戸松蔭女子学院大学人間科学部専任講師を経て京都大学大学院教育学研究科准教授。日本教育方法学会理事、日本カリキュラム学会理事、文部科学省「児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ」委員。「未来の学校ポスト・コロナの公教育のリデザイン」(日本標準)など著書多数。

### はじめに 教育方法学とは

よろしくお願ひします。今、紹介いただきました京都大学の石井です。今回は個別最適な学びをどう捉えるかということで、主体的・対話的で深い学びとの関係でということになりますけども、個別最適な学びの解釈学というよりも、そういった言葉が出てきている背景、さらに言うと、今、学校がどうなろうとしているのか、その先どうなっていくそうなのかという辺りの部分ですね、考えていければと思っています。

まず最初に自己紹介ですけども、私は教育方法学が専門で、要は、何のために何を教えるのか、そして、どう評価するのかという教育の内容とか方法、教育の中身に関する研究をしています。そのときにキーワードにしているのは学力なんですね。私は学力に関する研究をしています。

それはちょっとこだわりありまして、何かというと、一つは学びに対して学力です。学びというのは90年代以降、みんな「学び」「学び」と言うわけですけどもね。でも学びというふうなことを言う一方で、それがプロセス大事とか、子どもの主体性とか言うわけですけども、その一方で見落とされていることはないのかなというところ。学力という言葉は別に学力テスト

の点数を上げていくコツを研究しているわけじゃなくて、学び論が落としがちな、例えば、教師主語で教材研究をすとかという中身の話。プロセスも大事ですけども、結果として子どもたちにどんな力が付けばいいのっていうふうな結果にコミットする側面ですよ。それっていうのは別に学力テストの点数を上げるコツとか、そういうふうなことは別のところで、教師として、あるいは大人として学校・社会としての責任を果たすというふうなことでいうと、結果にコミットする。今時、学力向上なんて言葉が使われますけども、学力保障という言葉はもともとと言われていたんですよ。その場合の学力保障っていうのは、物事を知ることの力みたいところがあります。物事を知ったり分かったりというふうなこと。

それっていうのは単に勉強できたということじゃなくて、それこそ夜間中学校に通っているおばあちゃんが文字が書けるようになった。それによって、孫に初めて手紙、書けたみたい。そういうのがすごくうれしいという話があるわけですね。これってだから、学力テストうんぬんとかって、あるいは勉強うんぬんということじゃなくて、やっぱり物事を知ること。それは世界を広げていくわけですよ。だから、それは全ての人たちに保障されるべきものであろう。これが学力向上とかじゃなくて、

学力保障という言葉に込められていることの意味です。

だから、私は、物事を知ること、認識すること、そういったものの力というか、その可能性とか生き方の幅を広げていくというふうなことを大事にしながら研究しているというところがあります。学びとかいうふうな形だけじゃなくて、学力というふうな言葉で、これまで大事にされてきたものがあるんじゃないかなっていうことをもって研究してきました。

もう一つは、最近、資質・能力なんていう言葉があるんですけども、それに対しても学力です。資質・能力っていうと、要は、〇〇力みたいな形で、コミュニケーション能力、論理的思考力、批判的思考力とかね。あの果ては地頭力とか言ったりしますけれども。何でも「力」を付けたら、学校とかで何とかしてくれるみたいな形になるのは、これは幻想なわけですね。何より、学校ってそんな万能じゃないし、今時もうほんまパンクしつつあるというか、ほぼパンクしているというふうな中においては、何でもかんでも学校にみたいなことになっちゃったら困るわけで。学校ですべきこと。それから、できること。これに限定して学校で育成すべきで、かつ育成できる資質・能力の範囲をどう考えていくのかということがポイントになってくるわけですね。

だから、私が学力という言葉に込めているのは、資質・能力一般ってことじゃなくて、学校の強みと弱みっていったものをちゃんと見極めておく上で、学校で育成すべきで、かつ育成できる範囲って何なのみたいなことを考えてきました。だから、学力の研究です。学校というのは万能ではないと。たかが学校、されど学校というのが私のスタンスです。親御さんとか、家庭とかが恵まれてたりとか結構リソースがあれば、ホームスクーリングみたいなものもあるかもしれませんが。でも、そんなふうな家庭は一部ですし、かつ、それであったとしても人間って共同体の中で育っていくというふうなことは、それはもう人類の進化から刻み込まれているものであったりしますからね。だから、

そういうふう考えたときに、やはりたかが学校、されど学校かなというふうに思ってきました。

まさに今日お話しすることに関係するのは、その側面なんですね。学校ですべきこと、できることっていうことが今ほど問われている時代はないだろうというふうに思います。今日はこういう形でオンラインですけど、本当言ったら対面でもできたかもしれません。しかし、コロナの感染状況といったものが厳しくなってきたら、対面予定だったものをオンラインで。そうしたら完全に中止しなくていい。さらに言うと、こうやってオンラインというのもいろんなネット環境が関係しますから、途中で落ちるかもしれませんね。だけど、今回も、この教育実践学会さんがこのホームページがあって、スライドの資料があったりするわけです。何ならチャットとかもできたりすると、そこで学びは続けていけるかもしれない。

というふうに、実は学校っていったものが多層的に、教室が多層的にできてるんですよ。これがポイントかなと思います。対面の教室、オンラインの教室。オンラインの教室っていったものも、こういうふうに今、同時双方向でZoomとかでやれるような結構、双方向性の強い教室。さらに言うと、オンライン上のプラットフォームみたいな、Google Classroomとかもそうですけども、いわゆる非同期のオンデマンド型みたいな、そういう教室もある。二重、三重に教室っていったものが成立していて、それがかつ同時並行で進行している。これが今の状況かなと思います。

ですから、対面が難しくなったら、次はオンライン同時双方向。さらにそこでも難しい。学びを継続することが難しいとなれば、非同期のホームページとかそういったもので学びを継続してサポートできるというふうな、多層的な教室っていったものが同時進行で進んでるといのが今の状況かなと思うんですよ。

よく対面かオンラインかみたいな形で並立で、両方を対置して捉えがちですけども、実はリアルにも、それこそロイノートでも何でも

いいですけど、タブレットとか使ってみんなで議論とかしながら、対面でありながらパソコン、つないでね、それで書き込んだりして共有するじゃないですか。あれ、分かりますか。対面で教室におりながら、対面の教室でやりながら、要は、オンライン上の教室がもうひとつ並行で走っているわけです。それで先生は対面で投げかけて話したりしながら、時にオンライン上で書き込まれたこととかを見て、こんなこと書き込んでるわというようなことを拾い上げながら、それで対面とオンラインのこの二つ、三つの教室を行き来しながら授業を進行している。これが今、起こっていることだということになります。

だから、それによって今まで、なかなかみんなの前で話せないけどみたいな子どもたちが授業参加できるようになっていることもあるかもしれませんし。対面の教室っていったものが、それがちょっとしんどいという子たちにとっては、オンライン上の教室ぐらいがちょうどいいというふうなことになっているかもしれませんっていうことが、今、起こっているのかなと思います。

ただ、そこでポイントになってくるのは、こうやっていつでもどこでも誰とでも学べるというふうな形、ほんまにそうなっているかどうか分かりませんが、でも、いわゆるそういうふうなことがオンライン、やったらできるんじゃないかっていうふうに人々が思い始めたときに、何が起こるか。別に、だから、学校なんてみんなが集まって学ばなくていいんじゃないって話になるわけです。それこそ、今、現場の先生がたもいらっしゃるかもしれませんが、不登校の子たちってコロナをへて、どんな感じですかね。量的に増えてるみたいなこともあるかもしれませんが、それ以上に中身、変わってきてませんか。だから、積極的に不登校を選択するじゃないですけども、そっちのほうにむしろいいんじゃないっていうか。親御さんとか社会もそういうふうな世論が結構強くなってきていると。別にみんなが集まって学ばなくてもいいんじゃないっていうふうなこと

ですよ。だから、あらためて、学校の意味っていったときに、みんなが集まって学ぶことの意味ってというのがすごく問われているというところですよ。

なんでそれが問われるかという、要は、今の学校が子どもたちにとってハッピーでないかもしれないわけですね、結局。みんなが学校に集まって学ぶことがハッピーだったら、学校で学ぶことの意味なんてことは問われない。でも、今、こういう形でいつでもどこでも誰とでも学べますというふうになったときに、わざわざ集まらなくてもいいんじゃないというのは、集まるなんてうざいし、さらに言うところからいじめも起こるんじゃないというところですよ。自分の体もさらしますしね。だから今時、メタバースやどうやとかっていうので、アバターとか使ったら自分の顔もさらさなくていいわけです、結局。でも、果たしてそれで本当にいいのかどうかという。たかが学校、されど学校ということが、今、すごく問われているのかなと思います。まさに、この「個別最適な学び」ってというのは、こういった学校の大前提のところが変わってきてる。だから、その中で生まれてきてる言葉だということをお頭に置いておくことがまず大事かなと思います。

だから、今ほど学校ですべきこと、できること。それが問われていることはない。特にみんなが集まって学ぶことの意味ですよ。これ、先生がたどういうふう感じられますか。そこを先生がたがどういうふう感じているかってこともそうですし、目の前の子どもたちがどう感じているか。そこが問われてくるのかなと思います。

もうひとつ、さらっと言いますと、私は専門医であると同時に町医者でありたいと思ってやってきました。今週も二つ三つ、小学校に行って、大阪のほうのちょっとしんどい学校に行ったりもして。要は何かっていったら、専門医ということにいうと、自分の専門これだけです。私の専門、ちなみに何かという目標・評価の研究で。いわゆるタキシノミーってものの研究なんですよ。最近デジタルタキシノミ

一とかっていうのもそうですけどね。しかし、そういう言葉を使うようになってきてね。なんかタキノミーってというのが諸外国やったら当たり前やけども、日本でもそういうものが使われるようになってきたんだなって思うことありますけども。私はその目標分類学、タキノミーとか、あるいは、パフォーマンス評価とかルーブリックとかもそうですし、概念型カリキュラムとかっていうのも多分、日本で最初に検討したのは私だと思いますけども。今、何か新しい言ってるやつは昔、マニアックな博士論文の本があるんですけど、そこで大体検討してるんですけどね。そういった、特にアメリカとかのカリキュラムと評価の研究。これが専門医としての顔なんです。

でも、町医者ってことでいいますと、目の前の、やっぱり学校とか先生とか子ども、これに合わせて出す理論を変えるんです。あるいは足りなかったら自分で勉強するんです。そんなふうなことをやってきておきますと、ここに書いてるようにいろいろやっとなんというんです。でも、特に一番中心的にやってるのは、授業改善を軸にした学校改革。特に学校ぐるみで授業改善にどう取り組んでいったらいいのかということですね。そんなふうなことをやってきましたということなんです。

この2年ぐらいで主に出した本はこんな感じというので、一番左側のが私の一番専門医としての顔です。自己調整学習の研究も実はここで結構検討していて、思考ツールとかもそうなんです。今、あらためて見てみると、これ20年ぐらい前に大体、何ですかから研究を始めたやつで。もう今から10年以上前にまとめたものですけども、それがやっとなんか日本の中でも、なんかはやり物になってきてるのだからというふうに、感慨というか、何というかいうふうに思ってますけどね。一通り、今はやり物は大体ここで見事にフォローしてるなと思ったりします。



でも、今、言ったように授業を作るということを中心にしながらっていうので、小・中・高、特別支援学校に行って、授業を見たりとか学びの様子とか学校の様子、見たりしましたけどね。それで授業づくりということに関しては、授業づくりの暗黙知。このオンラインもそうですけども、教師ってというのは言葉もそうですが、身体で勝負するところがあります。結局、最大の技術ってというのは言葉以上に、間とかしゃべらないこととかね。だから、教えないことですよね。つまり、この身体の働きですよね。だから、そういうふうに言葉と身体で勝負する。さらに言うと、やっぱり中身のある学びにしていくなめには教材研究が大事。さらに目標と評価っていうふうなシステムの中でやっていく。どうやって学び続けていったらいいのというふうに、授業づくりの基礎基本というところもそうですし、全部盛りで暗黙知を解剖したみたいな感じなんです。

今日の話に割と近いのは『未来の学校』。コロナの中で出しましたけどね。個別最適とか ICTとかもそうですけどね。そのいろんな議論すべき点みたいなものをかなり網羅的には検討したかなと思います。今、高校が大きく変わろうとしているというときに、高校らしい本物の学びって何なのかとかね。これ、事例集です。あと学習評価に関しては小・中で、学習評価改革について事例とかを入れて書いてみたり。今日は、どちらかというところの先ですね。今、学校どうなっているのと。どうなろうとしているのと。個別最適って何というところ。その辺のことについてお話しするということになります。

## GIGA スクール構想の先の「多層的な教室」と学校像の分岐点

では冒頭のところで、かなりポイントになるところはちょっとお話ししたんですけども。個別最適とか令和の日本型学校教育とか。今までの学校教育が何が駄目で、どんなふうに変えていこうとしているのみたいな話なんです。そのときにでも一つ、今、この個別最適な学びとかって言うのが言われている背景は、やっぱりこのGIGAスクール構想もそうですよね。1人1台端末が入って、ある種、デジタル化が進んでいくというときに当たり前が変わるってことではあるんですね、確かに。

### GIGAスクール構想の先の「多層的な教室」と学校像の分岐点①：

- ICT活用、修得主義、個別最適化された学び、働き方改革、これらは「学校のスリム化」を招きがち。学校の丸抱え体質は問題だが、捨てるはいけないものを見極める必要がある（生活の場としての学校、成長につながる学びの保障）。
- 「オンライン学習」は、「授業」と「自学」の間の「遠隔学習支援機能」（クラウド上のもう一つの教室）の増設問題として捉える。対面とオンラインの「多層的な教室」を前提とした授業や学校生活と表現してもよい（授業で対面で家庭でオンラインという二元論でない）。教室での対面でのコミュニケーション（一つの教室）が難しくなっても、Zoom等を使えば顔も見ながらオンライン同時双方向でやり取りできる（二つの教室）、さらに、それが落ちてしまったとしても、学校HPやGoogleクラスルームなどのオンラインのプラットフォーム（三つの教室）があれば、課題のやり取りを通して、文通的、通信添削的なやり取りで学びを支援できるし、共同編集機能を使えば、顔は見えないけれど、リアルタイムで他の子どもたちとつながりながら一緒に学んでいる感覚を持つこともできる。
- 単元や授業が終わっても、オンラインの教室があれば、さらに学びや追究を続けたい子どもたちでグループを立ち上げて学び続けていくことができる。そして、時に教師も伴走しながら、オンラインのもう一つの生活世界（健全な裏サイト）で子どもたちが自主的に学びを続け、そこでの追究から、授業という対面の公共世界（教育的な舞台）で教師の指導の下で対話し深めていく問いや素材が生まれ続けることもあるだろう。一人一人の日記や学級日誌の中から、クラスの課題が生まれてくるように。

その当たり前が変わるって言うのはどういうふうに、どこが特徴になってくるのかということでしょう。さっき言った多層的な教室。これが理想でも何でもない。もう既に生まれているという認識が必要です。そういう見方が大事です。既に起こっているんです。だから、対面だけでなく、デジタルのところも複層的に。複数の次元を学校が教室提供し始めた。でも、これ実はよく考えると、子どもたちはもう既に対面と、それから、オンラインの世界と二重、三重、既に生きてたんですよ。だから、それに学校の側もちょっと追い付いたみたいな感じはあるかもしれません。

ふと思うのは、最近、子どもたち、今、中学とか高校とかもそうですけど、特に中学校とか。昔、荒れてるとか突っ伏すとかよくあったでしょ。しんどい学校でもどうですか。荒れてる、突っ伏すって見ます？ だいぶ少なくなっていると思うんです。これが何を意味するかですね。おとなしく授業を聞くんですよ。聞くけど、

でも、そこにいないみたいな感じ。だから、頭の中に何も入ってない。だから、それは一体、何なのかなど。ある高校の先生と話しているときに、ちょっと分かるなみたいなことになって。それってひょっとしたら、この子ら、もう現実の世界で突っ張るとかじゃなくて、他の別の世界を生きてるから、ここでエネルギー、使わなくてもみたいな感じになっているかもしれないね、みたいな話がちょっと出たりしたんですね。

だから、この多層的な教室っていうのは多層的な生活空間が既に、大人たちもそうでしょうし、子どもたちにおいても進行しているというところを頭に置きながら考えていくのが大事かなと思います。対面でオンラインが、二重、三重に進行しているんですよ。だから、今までやったら、ほんまに内職している感覚ですけど。その内職しているみたいなもの自体が、この内職コミュニティみたいなものがずっと同時進行で進んでいる感じですね。それを要は、パブリックな場に引き上げていく。一部パブリックな、そうやって内職コミュニティを作っていくこと。簡単に言うと、オンラインのいろいろ共同編集とかするじゃないですか。あれってパブリックな内職コミュニティみたいなものです。オンライン上の。クラウド上の、だから、そういうふうに教室が常に多層的になっているところの、その中で行ったり来たりしてるんだよっていう認識が必要かなと思います。だから、休校になっても学びは続けられる。さらに言うと、同じ場所になくっても、病室にいる子とかにも学びを届けることができるというところですよ。

さらに言うと、授業が終わっても、対面での授業が終わっても学びは終わらないかもしれません。つまり、オンライン上のプラットフォームで自分たちで、いろいろとこのフラグ立ててやりとりしたいとか。実際問題、例えば今時、文化祭とかの準備とかって子どもたちどうしてます。みんなで集まるのも集まるけども、結構、夜中とかも。夜中あんまりやりすぎたらあかんと思うんですけど。でも、自分たちで共同

編集したいとかっていうふうに、LINEとかでつながってやりとりとかってやっていますでしょ。こういうことが、もともとコロナ以前からでも子どもたちの生活空間にはあったんですが、それ、学びの空間の中にもそんなことが起こるといえるのが一つポイントかなと思います。

そうしますとね、結局、授業と自習との間の線引きが、結構、緩やかになってくるんだろうなと思います。結局のところ、通学。学校ではがっちりみんなで授業みたいな。それで家庭では各自が自習っていうのが、これまで当たり前だと思ってたわけですけども。しかし、学校の中でも、フレキシブルに自習的な空間が増えてくると思います。オンライン上で自分でアプリを使ったりとか、動画を見たりとか、そういうふうなもので自分で学びやすくはなっています。しかし、学び切れるものではないと思いますけどね。

でも、そうすると、それこそ簡単に言ってしまうと、それぞれ今までなら、1 単元の中とかでも習熟度別やっていくときとかに、最初全体でやって、後半の所でクラス、分けたりとかっていうふうなことをやっていることもあったと思います。そのクラスに分けて習熟度でやっていたところが、実はフレキシブルに、寺子屋とかね、あるいはそろばん塾とか、習字の塾とか思ってくださいね。そうやって同じ空間にはいるけども、各自違うことやっていますよみたいな。それでチューターみたいな先生が、個別指導塾みたいなので、さあっと回って行ってサポートしますよみたいな。そういうふうなのが単元の中に位置付けられとか。あるいは、1 時間の授業の中にそういう時間がちょっと入るみたいなことは増えてくると思います。

だから、学校という場におけるフレキシブルな学習の時間。これは新しいものでも何でもなくて。実は図工とか技術科とか、そんな感じでしょ。それぞれものづくりに入ったならば、全体で押さえた上で各自、隣、見たりしながらやっていくみたいな。ああいうのがさまざまな教科の中で生まれてくるだろうというところなんです。だから、特に、ドリル的な勉強は授業とい

うよりも寺子屋的にやれる。

一方で、既に起こっていることですけども、夏休みの宿題、やっていくというときに、1 人でやるんじゃないで、オンライン相談会じゃないですけども、みんなで集まってやるみたいな。だから、家庭においても、実は完全に孤独に一人ぼっちで自学というよりも、支援付きで自学とか共同しながら自学みたいなことが起こるかもしれないということですね。だから、オンラインで仲間や学校や社会とつながりながら自由研究や宿題に取り組む。これは高校、中・高とかになると、総合学習とかで本物の、実際その問題に挑戦するといったときに、もう学校飛び出して学んじゃうみたいな形で起こることかもしれません。

だから、そういうふうには、授業と自習との間の線引きっていったものが、これが緩やかになってくるというのが既に起こりつつあるところなのかなと思います。結局、個別最適うんぬんということの背景にあるのは技術の進歩もさることながら、それに影響を受けているんですけど、子どもたちに多様性といったものがすごく拡大しているということですね。特に、特別なニーズを持った子どもたちの数も増えているというのも、実はじわじわ大きいんだと思います。外国ルーツの子たちも多いですからね。今までもともと日本にも多様な子どもたちはたくさんいたわけですけど、でも、その量といったものが一定のラインを越えてきているというところだと思わうんですね。

だから、個別最適なんて言わなくたって、現場にいたら絶対分かるはずなんです。一人一人にやっぱり応じざるを得ない。そういうふうな、まず目の前の状況でそうなっているということ考えたときに、そこにどういうふうに対応するか。そこで例えばこの1人1台端末であるとか、多層的な教室が生まれているというふうな、この環境をどう生かすのかというふうなことを考えていくことが重要かなと思います。多かれ少なかれ、特に高校は修得主義のほうに寄っていくと思います。何かって言うと、簡単に言えば通信制高校みたいなものです。だから、最終的に

授業出席っていうのは、リジットにそんなに厳格にやらずに、最終的にちゃんとこれだけのものをクリアしたら OK ですってことです。そのときも二つ、修得主義っていったときも検定試験を全部クリアしていった OK みたいな。スタンラリーみたいな形の修得主義っていう考え方もありますけれども、かなり通信制高校の一部はそういう所あるかもしれませんね。今時スクーリングもして充実していますけどね。で

GIGAスクール構想の先の「多層的な教室」と学校像の分岐点②：

- ・オンライン上の教室は、学校外のSNS上の私的なやり取りの場を、もっとパブリックな形にしたものと考えられることもでき、時にモラルを欠いて傷つけあうことにもなってしまうネット上での私的なコミュニケーションのあり方を、より成熟したものへと組み替えるための練習の場と捉えうる。
- ・オンラインでも教室に参加しているという状況は、「通学」や「不登校」の観念も変えていこう。さらに、**学校という場におけるフレキシブルな学習の時間**（ドリル的な勉強は授業というよりも寺子屋的にやれる）、**家庭における支援付き自学**（オンラインで仲間や学校や社会とつながりながら自由研究や宿題に取り組む）というオプションを想定すると、子どもたちの自律的で協働的な学びの時間を拡大する手立ても考えられるだろう。
- ・「**小さな修得主義**」（知識・技能の習得を軸にした検定試験的なカリキュラム）と「**自習室**」（**個別化・早修・寺子屋的**）の方向性か、「**大きな修得主義**」（知識・技能を総合的に使いこなす挑戦的な課題を軸としたプロジェクト型のカリキュラム）と「**自主ゼミ**」（**個性化・拡充・大学的**）の方向性か。

も、実は大学っていうのも修得主義なんですよ。あんまり実感ないかもしれませんが。出席日数とかっていうふうなことじゃなくて、結局、単位、取ったかどうかでことですよ。だから、大学は修得主義なんです。しかし、小さくはない。

つまり、一つ一つの検定試験の束みたいなもので、それで修得、認めますよっていうか、卒業、認めますってことにならないでしょ。何かっていうと大抵、卒業論文・卒業研究みたいな形で大きめのタスクというか舞台があるんですね。そこで、さあ、実際学んだこと基にちゃんと力発揮して、あなた、一人前と認めますよというふうな、割と大きめの舞台があるということで、大きめのタスクを軸にして。だから、大きな修得主義というふうに言うことができます。

その個別化・個性化に関して言いますと、後のほうでも表、付けてますけども、個別化と個性化っていうのはもともと歴史的に見てニュアンスが違うんですね。個別化っていうのは、できるできない、遅い早いみたいな話で。だから、個別の内容っていったものを早く進められるかどうかみたいなところで考えがち。だから、一人一人ってなってくると、自分でってなると、

自習室みたいなものに近づきます。小さな修得主義っていうのは、実習室で各自が自習して、最終的に検定試験受けて、英検受けて合格みたいな。極端な話、英語はもう検定試験でいいのと違うみたいなことですね。数学であれば、数学検定、受けたらいいんじゃないですか。各自ドリルなり何なり、自習室。誰かにサポートしてもらいながらやったらいいんじゃないですか。授業、みんなで受ける必要ございませんっていうのは、これは極端な小さな修得主義の発想ですね。だから、教科って検定試験でいいんじゃないと。ここが一つポイントになってきて。本当、それで教科の学習、学びを保障したことになるんかどうかっていうことが実は問われておるわけです。

だから、個別最適な学びっていうのは、この修得主義との関係で考えていくということになりますけども。そのときに自習室で検定試験みたいな小さな修得主義イメージで考えるのか。あるいは、大きな修得主義で、今回の観点別評価に実はそういうところあるんですが。教科とかの学びをちゃんとクリアするのは、単に検定試験だけ違うよねと。学んだことを基に、何らかの形でまとめたもの作ってとか、作品作って発表してとか。そういうふうなことまでできて、ようやく、ちゃんとその教科の学習クリアしたと言えるよね。これがいわゆる今回の観点別評価の根っこの発想になるわけです。パフォーマンス評価とかもそうですね。

そのときって大学とか、あるいは文化祭とかも似てるんですけども、各自フレキシブルにやりますけども、それってこつこつと自分で自主勉強してることよりも自主ゼミ。自分たちでそれぞれパートに分かれて何かやりますよというときに、次のゼミ発表のためにちょっと事前にみんな集まるかいうふうな、これ自主ゼミです。だから、一律にやっていくわけじゃなくて、必要に応じて自分たちで集まって議論するみたいな。

だから、大学とかだと割と一人一人がつながったりとか離れたりとかしながら、それぞれの

3. 3本の政策と実現に向けたロードマップ  
**【政策1】子供の特性を重視した学びの「時間」と「空間」の多様化<目指すイメージ①>** ● ● ● 23

すべての子供たちの可能性を最大限引き出すことを目指し、子供の認知の特性を踏まえ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「そろえる」教育から「伸ばす」教育へ転換し、子供一人ひとりの多様な幸せ(well-being)を実現するとともに、一つの学校がすべての分野・機能を担う構造から、協働する体制を構築し、デジタル技術も最大限活用しながら、社会や民間の専門性やリソースを活用する組織(教育DX)への転換を目指す。これを実現するためには、皆同じことを一斉にやり、皆と同じことができることを評価してきたこれまでの教育に対する社会全体の価値観を変えていくことも必要となる。

**子供たちが多様化する中で紙ベースの一斉授業は限界**  
 発達障害の可能性のある子供  
 特異な才能のある子供

2017年改訂により資質・能力重視の教育課程へと転換

**多様な子供たちに対してICTも活用し個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実**  
 発達障害等  
 特異な才能のある分野を伸ばすため、大学や研究機関で学ぶことができる

自分自身の特性を理解し、ICTを活用しながら、自分に合った学び方で進めることができる

特異な才能のある分野を伸ばすため、大学や研究機関で学ぶことができる

子供たちが多様な学びの場を必要とする

個別最適な学び

協働的な学び

不登校・不登校傾向  
 日本語を家であまり話さない子供

学校の中に通常の学級から離れて学習ができる学びの場、教育支援センター、不登校特設校、夜間学校、フリースクールをはじめ、NPOや民間等の力も活かしつつ、従来の学び方は別の形で学ぶことができる

家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子供  
 ※授業や読解力の低下は重要な教育課題

特別なかきゅう組、ICTも活用しながら、日本語習得と同時に学びを進めることができる

家にある本の冊数が少なく学力の低い傾向が見られる子供  
 タブレット等の活用により自分のペースで着実に自分の理解に応じて学びを進めることができる

**子供主体の学び**  
 子供の理解度や認知の特性に応じて自分のペースで学ぶ

**主体**

**教師による一斉授業**  
 一定のレベルを想定した質の高い授業展開

**学校種 学年**  
 学年・学校種を超えて学ぶことや学年を越えた学びも

**空間**  
 教室以外の選択肢  
 教室にじめない子供が教室以外の空間でも

**教科**  
 教科等横断・探究・STEAM  
 教科の本質の学びとともに、教科の枠組みを超えた実社会に生きる学びを

**教師**  
 Teaching  
 指導書のとおり計画を立て教える授業

**Coaching**  
 子供の主体的な学びの伴走者へ

**教職員組織**  
 多様な人材・協働体制  
 多様な教職員集団  
 理数、発達障害、ICT、キャリアなど専門性を活かした協働体制

※子供の数の考え方や定数等については、スライド10の図表を参照。  
 ※図られたリソースの中、個別最適な学び・協働的な学びを追求している学校や教員も出ているが、リソースでは一般的な限界があることを想定して図示化

内閣府 総合科学技術・イノベーション会議 (CSTI) 教育・人材育成ワーキンググループ  
 「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」(2022年6月2日)

ペースを生かしながらやっていくってときに、その個別と共同の間みたいなものって結構柔軟にあるんですね。だから、それは自主ゼミが結構大きい。

個別化っていうふうなことでいうと、さっき言ったようにできるできない、遅い早いになりますけども。個性化っていうのはできるできないとか遅い早いじゃなくて、その子なりの持ち味ってことです。だから、その子なりの考え方とか興味・関心とか。だから、一人一人っていうふうないった場合も、この個人差っていった場合も、量的に比べられる個人差。それ垂直的です。それに対して、その子なりのかけがえのなさ。それが水平的です。だから、垂直的な価値でいうと、各自のペースでみたいなことになりますけども、水平的にその子の良さってことでいうと、逆にばらばらだとその子の良さも分かんないんですね。

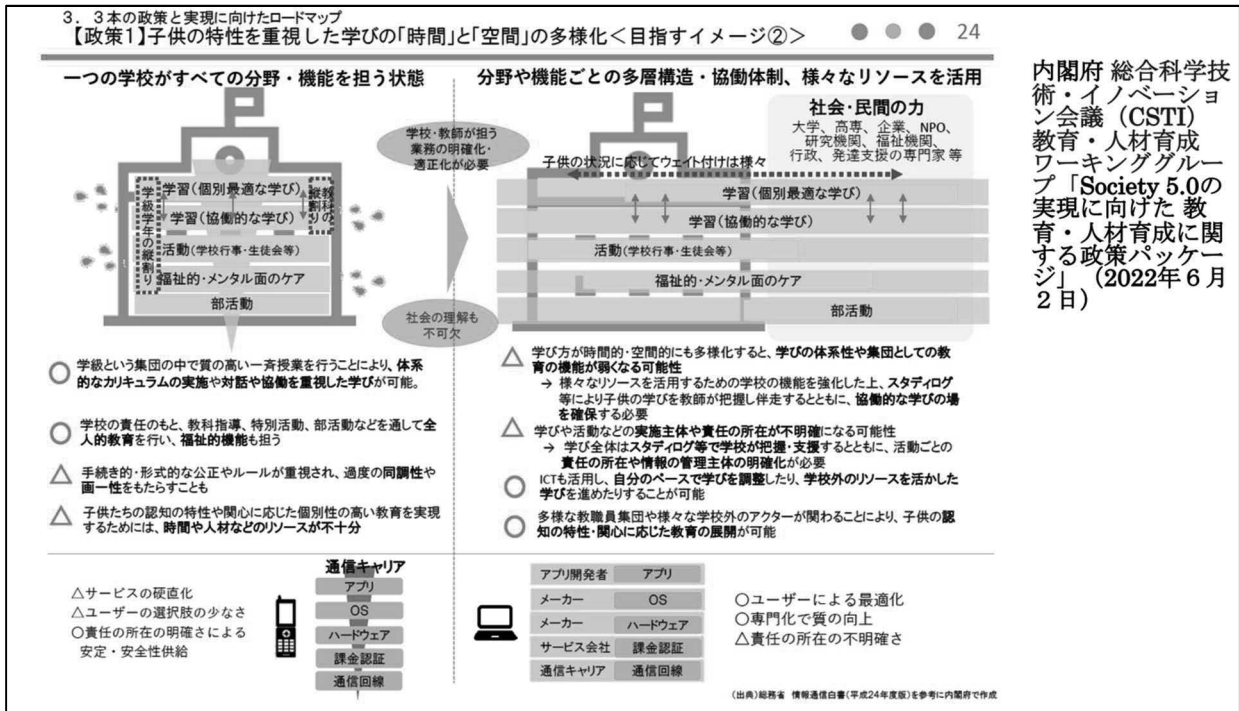
だから、個性化というのは、実は共同性みたいなものと裏表の関係です。みんなの中で生かされてこそっていうか、そこで発見されてこそ、その子の良さが見えてくるということがありますね。だから、個別最適っていうことと協働とかっていうことをばらばらに考えるんじゃなくて、実は人間って共同性の中に生きているわけですから、問題は生きづらい共同になって

ないかっていうふうな、共同性の質のほうを考えていくということが大事になってくるのかなと思います。

だから、今、ざっくりこう言いましたけども、学校の在り方っていったものが多層的な教室が生まれ、その中で、学校っていったらみんなが集まって学ばなくてもいいんじゃないって、そこにフレキシブルさが生まれてくると。そうなってくると、最終的にこれだけでできるときやいいでしょっていうふうな、修得主義の方向に間違いなく寄っていくところなんです。ただ、そのときに完全に検定試験の束みたいな形でみんな交わらずに各自やるみたいな、タスクなして終わりみたいな。それでほんとうに子どもたちの学びももちろん成長を保障することにつながりますかというところが、ここが問われていると。だから、個別最適な学びと協働的な学びが一体的ってことの意味は、そういうことになってきます。そういう大きな流れの中で考えていく必要がありますよってことですね。

今、言ったようなことは、もう本当、分かりやすく、このたび内閣府のほうの政策のパッケージの中でこんな図、出てきたりするんですよ。みんな一斉一律っていうふうなことやったら、分かん子も出てきますよと。しかし、右側、何かというと、みんな集まってっていう子





内閣府 総合科学技術・イノベーション会議 (CSTI) 教育・人材育成ワーキンググループ「Society 5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ」(2022年6月2日)

もいるかもしれないし、たまに間引き運転みたいので、今は学校、行ったらよう見かけますね。オンライン参加みたいなものですね。間引き運転みたいな形で、だから、クラスによってはオンラインで参加してる子に、最後、帰りの会とかで、みんなのほう、タブレット回して、みんなの顔、見える？とかこういうのはほほ笑ましいですよ。そうやって一人一人の距離感とかペースで学べるように、タブレットとかオンラインの教室があることによって距離を調整できるわけですね。だから、そういうふうな個別最適な学習環境の空間が生まれてきてるんじゃないかと、それもっと積極的に推進していきましょうっていうふうな、そういう話なんです。

とても分かりやすいんですが、さっきの話、注意しないと結局のところ、ばらばらになっちゃうかもしれないですね。オンラインの教室っていうのがどんどん広がってきますと、そっこのほうが便利でうざくないんですよ。そうすると居心地いいかもしれないんですけど、長い目で見たときに果たして子どもたちの成長とか発達とか、長い目で見たときのハッピーにつながるかどうかっていうことは、大人のおせっかいかもかもしれませんが考えてもいいんじゃないかと思えますね。たかが学校、されど学校だというふうなところですね。

さらに言うと、こんなふうな図も出てきてるわけです。左側がこれまでの学校。オールインワン。全部。もうここだけ。だから、コロナかかって、コロナでみんな学校が閉まったら、にっちもさっちもいなくなっちゃう。誰も子どもにサポートできなくなっちゃう。これはまずいと。社会全体で子どもに関わるっていうのは、これは結構なことなんです。とてもよく分かる。けれども、実際問題、この右側っていうのは何かっていうと、分業をどうしまさかっていうふうなモデルです。これ、一つポイントなのは、モデルになっているのは今まで学校は工場モデルだっていうに散々批判されましたけども、新しいのはプラットフォームビジネスモデルです。要は、これまでのガラケーとスマホはどう違うかって話です。

下、見てください。これね、図の下。ガラケーやったら、ドコモやったらドコモで全部アプリケーションとかも全て一律。自分たちの中でパッケージ化してそろえると。しかし、今時のスマホって、スマホ自体は箱物ですけども。箱はメーカーは違うけど、中身のアプリって横断的ですよ。これ、OSとかもそうです。だから、そういうふうの一つの箱の中で、機能別にどれでやりますかみたいな形で横断的に考えていくと、連携もしやすくなるんじゃないで

すかというふうな、そういうプラットフォームビジネスのモデルで学校を考えていきましょうと。工場モデルみたいな形じゃなくって、プラットフォームで考えていこうというのが右側のモデルです。

これ見てどうですかね。先生方はどういうふうに感じられますかね。これ、学習、活動、福祉とか部活動とかっていうふうに、学校の機能をこうやって分類して、それぞれ学校の内側で主にやること。外側で連携すること。この辺を区分けしましょうよって話なんです。

それではっきり見えてますよね。部活は完全外です、これね。これは内閣府っていうのが作ってるやつですけど、今時、教育政策考えるときにちょっとアンテナ、高くしようと思うと、文科省を見てるだけやったらいかんのですよ。今時、文科省は結構防戦一方なところがあります。もっと政府よりの所。内閣府とかさうですよ。その前にあったのは、例えば経産省とかの関係があったりしました。だから、もう今、教育政策は複数の省庁が入り乱れているところがあるんですね。だから、もうちょっとある種、風上のほう。そっちのほうを見ておいて、ちゃんとそれを批判的に検討する視点が必要かなと思います。

今回、令和の日本型学校教育の具体化とありますけども、批判的にちゃんと検討した上で具体化していったほうがいいだろうというところですね。例えばこの図一つ見ましても、結局これだったら、学習面も個別最適な学び、結構外なんです。協働的な学びもあれやけど、この学習面も、結局、個別最適と協働的の線引きはどこでなされるのかというところで、これが例えば教科と総合っていうふうに捉えられてしまったとすれば、教科学習、割と外に出す方向になっちゃうんですね。

でも、そうじゃなくて教科の中も個別と協働って両方あるよねっていうふうに捉えると、また話が違ってくるわけですけども。この辺やっぱり冷静に見ていかないと、さっきの話、教科学習なんて検定試験でいいんじゃないっていうふうなことにそういう話に容易に流れて

しまう。特に先生がたが、今、もう疲弊して量も質も担保できないといったときに、誰でも学習とか子ども支援できると。結構なことなんですけども、それもやっぱりよしあしあるわけですね。誰でもできる仕事にしていくということは、地位待遇の改善とは全く逆行しますので、だから、どこにお金をかけるのかというふうなことを考えるときに、そういったところもやっぱり冷静に見ておく必要があるというところなんです。

やっぱり学校で多くの時間、みんなで過ごすとする、そこでともに過ごす教師の地位待遇の改善にもっと予算を付けるべきだと私は思いますけれども。しかし、むしろ外部のほうにもっとお金、回したほうがとか、システムのほうにお金、回したほうがみたいな。予算が、成長してるんやったら両方付けてくれるんですが、縮小のサイクルなんで、そこは非常にシビアな話になってきます。だから、その辺はやっぱり現場からやっぱり声を上げていかないと、押し切られてしまうというところもあるかなと思います。

最終的に残るのは何かというと、社会性の訓練。それから、福祉ケア。休校期間中に少なくとも社会が感じたことはそこですね。子ども、預かってもらえなかったら、仕事できないなど。だから、福祉的機能は大事。だけど、それで託児所みたいに思われても困るところありますね。さらに言うと、やっぱり一人一人がばらばらっていうのは規範意識がみたいな形で保守的な関心からすると、行事とかいうふうなこととか。そういう行事で社会性とかを育てる。これ、一つ間違えと管理になるわけですけども、そっちのほうになっちゃうかもしれませんねいうところなんです。

だから、そういうふうな今の大きな流れからすると、学校っていったものは何であって。あらためて学校すべきこと、できること。この辺を見極めていきましょうよということが問われているというところなんです。まず、こういった大きな流れを頭に置きながら、個別最適な学びみたいなものを考えているということでもあります。

ちなみに、そこで学びの中身の話を残りの半分の時間でやっていこうかなというふうに思いますが、実はコロナの前から絵は描かれているんですね。平成30年の段階でこれまた文部科学省、こういうふうな会議があるんですけども。その中でこういう図があるわけです。分かります？パソコンみたいにバージョンアップしていくみたいな。でも、ある社会心理学の、進化心理学の先生が言うてて僕も同感ですが、機械の進化と人間とか種とか社会の進化っていうのは同列に扱うものではないというところ。そんなに社会っていうのは、急速に変わるといっていいものではないというところあるんですけど、少なくとも、今、産業構造からすると第4次産業革命っていうふうな言葉もありますけれども。そういうふうに産業構造の変革期では、社会変動期ではあるのは間違いないというところ。それを日本はやっぱりキャッチアップ型ですから、Society 5.0とかっていうふうにかっ飛ばして、Society 5.0なんて海外に言ったって通じませんよ。第4次産業革命って言わなきゃ駄目です。そこはやっぱり日本的なんです。だから、今、Society 5.0っていうと、あるもの。そういうものがあるっていうふうには仮定でき

ますから、そこにキャッチアップしようっていうふうには、またキャッチアップする近代化の仕方みたいなものになっていくと思います。

そのとき、その社会のバージョンが変わっていきますよといったときに、学校のバージョンも変わるよっていう、これ非常に分かりやすい話なんです。分かりやすいけど、分かりやすいものって大体単純化してますから、批判的に見ないといけないんですけど。勉強の時代から学習の時代、さらに学びの時代へと分かりやすくは書いています。ここでポイントになってくるのは、個別最適な学びといわゆる主体的で対話的で深い学びの関係を考えると、この図、割と参考になるわけですよ。

よく見ると、これ、学習の時代の所で、主体的で対話的で深い学びを書いてますでしょ。これ何かっていうと、要は勉強の時代とかっていうのはやり方主義とかお勉強みたいなことで、それって本物の学びを保障してないよねと。勉強やっても学んでないよねっていうふうなことが、そこを考えていこうというのが、この学校ver. 2.0ですね。なんですけど、それっていうのはよく考えたら、そもそも良心的な学校の先生って本当の学びって何みたいなことで、絶対考えてきたことなわけですよ。ですから、要は主体的で対話的で深い学びというのは、そ



った先生がたの良心的な仕事、ある種、授業づくりであるとか教育実践の不易を再確認しましょうというふうなそういうベクトルが強かったわけです。だから、現行の今、実施されている学習指導要領の改訂って、割と日本型教育っていったものを、学校教育をポジティブに考えてますよね。その良さっていったものをちゃんと生かしましょうっていうふうなことを言ってるというところです。

この先の学校 ver. 3.0 っていうふうなことになってくると、学校だけ丸抱えじゃなくて、さっきの話、学校がプラットフォームになっている所とつないでいきましょうみたいなハブになっていく感じですね。だから、ラーニングオーガナイザーとかっていうふうに書かれるわけです。それぞれ、それぞれデータが連携されたりすると、塾とかのデータとかも集まってきたりしたならば、それぞれ学校の外側の習いごとで、この子は小学校3年生だけど分数の掛け算とか割り算っていったものも解けるようにはなっているようだ。だったら、学校でやらなくていいんじゃないみたいなことも出てくるかもしれません。しかし、それでも多くの小学校とかの、あるいは算数・数学の先生も危ういなって思うと思います。解けたからといって分かっているとは限らないし、肝心なところの数学的な認識みたいなものが育ってなかったら後伸びしません。だから、その辺こそ、あらためて考えないかんわけですが。そういうふうな複数の学びの場っていったものがどんどん広がってきますんで、そしたらそこへのハブみたいな形で学校なりが位置付けていったらいいんじゃないかと。そういう側面は強まってくると思いますけど。そういう話になります。

だから、授業づくりの不易というふうなことよりも学習の組織というか、学校のハブ機能みたいなものを高めていきましょう。そうすると、より教師の役割としてコーチングと言われるんですけど、進路指導みたいな話です。ここで学んだらいいんじゃない。こういう所どうみたいな形で、そういう側面はやっぱ強くなってい

るところはあるかもしれません。

しかし、これ、コロナの中で、それこそ日本がこれまで良いというふうな、良さとして言うていた共同性っていったものがすごく生きづらさっていうふうな映り始めた。だから、コロナをへて、この学校 ver. 3.0 というので、学びの時代とかってというのが、今までの日本の学校の良さじゃなくて、悪いところを何とかしないとというふうな形で結構移っているところがあると思います。でも、ラーニングオーガナイザーになるからといって、学習の時代の遺産というのは大事にせないかんわけですよ。授業づくりの不易みたい。そこを踏まえた上でラーニングオーガナイザーになりましょうっていうふうなことがあるわけですが、その辺をすっ飛ばしてしまって、もうこれまでの学校なんて駄目だからっていうふうな全面的に否定して脱学校に流れる。これは危ういというところですよ。

もうひとつ言いますと、令和の日本型学校教育っていうのはあくまで中教審の一答申ですね。ですから、学習指導要領とは全然重みが違うということも認識しておく必要があると思います。大本は学習指導要領。個別最適な学びとか協働的な学びっていうのは、さっき言いましたように、学校の在り方、前提とか組織改編に相当関係すると。だから、学習の進め方とか手法みたいな話じゃ実はないんですね。本来ならね。

そういうふうな考えたときに、一人一人に応じるというのは、今の目の前の子どもたち見たら当たり前なわけです。しかし、それをより明確に位置付けて、かつ ICT 環境とかそうやって学校自体の OS、当たり前が変わってきたときに、よりその一人一人に応じるっていう切実な要求にこたえられるような学びの環境を作っていくましようよっていうのが、個別最適な学びとか、協働的な学びって話になりますね。

一方で、その先にどんな学びを目指すのとか、どんなふうな子ども、育てるのっていうふうな大本は、これは学習指導要領が、そこがポイントになってくるわけです。だから、大本が学習

指導要領ですから、あくまで学びっていうふうなことを考えるのであれば、優先すべきは主体的で対話的で深い学び。ここです。個別最適な学びってというのは、それを実現するための手段的な位置にある。目的と手段を転倒してはいけないというふうなことを思います。

その辺、あらためてこういった図も根拠にしなからではありませんけれども、主体的で対話的で深い学びと個別最適な学びっていうこととの関係を捉えるならば。つまり、学校 ver. 3.0における主体的で対話的で深い学びの追究っていうふうに考えるときに、個別最適な学びっていうふうな、そういう部分がよりクローズアップしてきますよというふうな意味合いになってきます。そんなふうと考えていくのが大事ななと思いますね。

ちなみに、脱学校っていうふうに言いましたけれども、学校をスリム化すれば子どもたちハッピーになるかどうかっていうことは、一方で考えなきゃいかんわけです。これ、実は30年前から言われていて、歴史、知ってはる人やら分かります。やろうとしたんです。学校スリム化。週休2日の話。それで週休2日でゆとり、生まれたかいうことです。子どもたちに。逆ではなかったですか。むしろ学校の外側のほうが学校以上に学校くさくなっている。だから、部活とかにしても心配なのは学校外のほうが、学校ってのは逆に建前で動いてますからね。多少なりとも。公教育とかっていったら。歯止めは多少効くんです。透明性もあるんですよ。しかし、習いごとにしてしまうと透明性、なくなってきました。さらに言うと、保護者とかももっと強くみたいなものがあると、逆に加速する可能性がある。だから、気を付けないと、学校の外側に外注すればハッピーかいうたらそんなことはない。子どもたちのまさにゆとりとかハッピーかっていうときに、子どもの学习生活全体でやっぱ考えていかなきゃいけないところがあります。だから、脱学校すればええってわけやなくて、学校の中側もそうやし、あるいは学校の外側においてもそうですが、今のこの学校くさい学びを内と外両面において問

い直していく、ある種、卒学校っていうふうなこと書きましたけど。そういうことが大事ななと思います。

学校の外側も、学校化されてるといふか学校以上に競争的であり、やり方主義だったりするわけです、学校の外側がハッピーのように見えているかもしれませんが、それは冷静にちゃんと見積もったほうがいいというふうに思っています。そんなふうなことが今、起こっておりますよということですね。

その中であらためて、授業とか学びを支援するということの不易の部分を確認しておくことがまずは必要ななと思います。いろいろな所で言ってますけど、教えることから学ぶことへとか。まあまあスローガンとしてはもうずっと言われてきて、結構なことや思いますよ。それはそうでしょう。教師主導から学習者主体へ。教師はおせっかいですからね。そういうの常に言い続けることはいいかもしれません。一斉授業から学び合い。さらに言うと、個別最適化されたとか、個別最適な学びとかっていうふうな。

しかし、これもほどよく改革というのはやったらいいのですが、次から次へと新しい何とかなの学びみたいなものが出てくるというのは、これは現場からしたらたまったもんじゃなわけですね。しかも、お上から来ると。都道府県とかの教育委員会でさらに増幅されてくるということです。何のこっちゃ分からなくなります。だから、主体的で対話的で深い学びっていうふうなことに向けて、じっくりといろいろと取り組みとか理解とか進めてきて、さあ始めるぞと思った瞬間、また何とかな学び。個別最適な学び。ええって感じですよ。どっち向えばいいのみたいな。

さらに言うと、もう真面目にやってきた人ほど思うと思いますよ。もうこんなふうにしつかりと自分なりにかみ砕いてやろうとしてきたところで、次々新しいものが出てくるというんやったら、もうやり方教えてと。何やったらええんですかということになりますわね。ほどよい外圧ってというのは実は大事なこともありま

すけども。しかし、次から次へとマジックワードみたいに言葉が入ってくることによって、現場は最終的に思考停止に陥ると。その結果、やり方、手法主義に陥ってないですかってことですね。アクティブラーニングのときやったらメソッド。それでICTやったら何とかアプリ。これさえ使っときゃええということになってはいませんかという事です。よく、授業とか学びっていうのは古い新しいで話しがちですけども、古いか新しいかなんてことは全然問題ではないわけですね。要は、そこにほんまに学びがあるのかということちゃんと見極める必要がある。

それこそ今時、個別最適なことというのが先進的みたいに言われますけども、寺子屋と考えるとしまえばめっちゃくちゃ古いんですよ。それこそ日本の伝統的な良い授業とか、一斉一律は悪みたいに言われますけども、伝統、日本の良い授業のイメージの一つとして、一斉なんだけど創造的みたいなことありますでしょ。だから、小学校とかの授業を見たら、発問して、いろんな考え方がぼうっと出てきて。それをつないでゆさぶって、1人では到達できない高みに持っていく。練り上げのある授業とかって言われたりしますけれども。これって斎藤喜博なんて実践家がいるとか、東井義雄とかいて、そういう人たちが結構、そういう授業の原型作っていったところがあります。

ちょっとマニアックな話しますと、その斎藤喜博なり練り上げ型の授業というのは、実は、大正期に日本に入ってきたまさにドルトン（プラン）とかもそうですし、個別最適な学びでしょ、まさに。自由で個別最適な学びっていったものを日本風にアレンジして、個別性と協働性をミックスした結果生まれてきたもんだっていうふうな認識をどれだけの人が持っているかということですね。だから、国風文化じゃないですけども、外来のものとかってというのはその文化に合う形でこなされていきます。

実は今、一斉一律っていうふうなことでネガティブな部分もありますけども、一斉授業の中にも実は個別性とか個性みたいの、そこを位置

付けた形で展開している。一人一人座席表指導案とかもそうですけど、座席表とかで一人一人を丁寧にみるからこそできるような、みんなで学んでいく授業っちゅうこともあったりするわけですね。だから、一斉一律っていうことでバサッと切ってしまうのも、これも雑な話。逆に学び合いであるとか一人一人。特にこの間、ICT活用ってことかというと、複線型って複線的に進んでいく。だから、同じ場にはいるんだけど、それぞれやってること違うというふうな、そういう状況はより生まれてくると思います。ただ、さっき言った授業の中での自習空間みたいなね。フレキシブルなものが出てくると複線化していく。

これは例えて言うなら、先生方が学校で学校としての研究テーマがあるのとともに、自分たちが個人研究テーマを持って、それぞれ実践しているようなそういうイメージです。国語とかやったら結構そういうの出てきてますよ。共通でみんなで話し合う側面もあるんですが、各自が自分で読んで自分なりの読みとかで、問いとかを作って、それを各自やってるんやけど。共通に、この辺のみんな同じような所でつまづいてるとか考えてるなということクラス全体でやっていくみたいな。独立の個人学習があって、それを相互学習でつないでいく、そういうふうな展開も出てきているかなと思います。

だから、複線型。さらに言うと、社会科っぽくない社会科の板書みたいな。要は、思考ツールみたいなものがぱあっと示してあって、中身に即さないでどの教科も似たような形で展開できますよみたいな。そういったものも出てくると思いますけど。でも、それとても形だけになってしまっただけかということところやっぱりありますよね。各自でそれこそタブレットとかで、一人一人の問いとか立てて、それでスライド、まとめますよ。簡単に言うたら自由研究みたいなもんです。だから、自由研究、学校でやってるようなもんです。総合だったらまだしも、教科の中で自由研究を各自やるみtainな状況だと思って考える。

そのときにタブレット見てて。各自、今時の

子やからきれいに作りますよ。でも、そのスライド見てるときに、先生、何を見るかです。それこそ、単に情報を集めてきて貼り付けてるだけ。調べ学習じゃなくて集め学習になってないかなと。調べ学習っていうことでいうと、ちゃんと着眼点持って、内容ある視点から整理してっていうふうなことがないと、調べ学習になってこないわけですけどね。

さらに言うと今時の大学生はいろいろ調べてきますんで。だから、何となく研究ごっこみたいなものはできる感じはします。しかしながら、調べてきても、で？って話なんです。一言、で？っていうふうに言うと、詰まっています。で、あなたいろいろ調べてきたのは分かるけど何、言いたい。なんでそれ、やったんってところがあんまりない。だから、形だけの調べ学習で深め学習になっていないということがあるかもしれません。

### 改革に踊り、揺れる「授業」 二項対立の裏で進む手法主義

- 「教え」から「学び」へ（教師主導から学習者主体へ）、さらには、「授業」から「学び」へ（学校から合校へ）？
- 「一斉授業」から「学び合い」へ、さらには、「個別最適化された学び」へ？ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の二項対立？
- ゆらぐ「授業」、進む手法主義（〇〇メソッドから〇〇アプリへ）

※「学び」の強調は「教えること」を照らし出し、個別化の強調は、集団での学びの意味を照らし出す→「授業」が問われる。

学習の形態とか学び合いとかもそうやし、一人一人とかっていうふうにいったときに形が優先されがちところが結構あって、中身が伴っていない。それ、何で見たらいいかといったら、そこに学びがあるのか。どんな形であろうが、子どもたちの学びがそこにあるかどうか。そこを見極める教師の目っていうのがやっぱり大事になっています。

データ活用でいったら、一人一人のデータのログ、取れますね。でも、ログ、取れたって、それから子どもたちの学びのどこにつまずきがあって、そこから何を読み取るかっていうふうなことが大事なわけです、結局のところ。それはちゃんと先生のほうに学びを見る目がなければ、逆にデータに埋もれてしまいます。

だから、今、実は案外と見失われがちですけ

ども、こうやってデータとかそういうふうなものがたくさん履歴に残るけど、何がポイントで、それでそこにどういうふうな学びの姿をとって課題を見いだすか。教師の見る目がすごく大事になってきてる。個人化している分、そこに形だけ何かやってる分、そこに学びがあるのかっていうようなことをちゃんと突き詰めて問うていく。そこがポイントになってくるかなと思いますね。新しいか古いかということじゃなくて、どんな形であろうが、そこに学びがあるかどうか、その部分がやっぱり大事というところですね。

教えるか学ぶかみたいなことがよう言われますけれども、この2項対立っていうのはちょっと注意が必要と。学びのそのスローガンとしたらいいんですよ。しかし、教えるよりも学ぶことだっていうふうに言ってる人も、だからといって、ほったらかしては絶対思っていないはず。良心的な先生だったら絶対そうです。大人でもそう。言うたら、社会人になって上司だからこそ、今、この上司の人材育成の本がはやってるわけですよ。ほったらかしでは育たんです。結局、システム作って、何らかの形で手をかけるって、手を出すっていうことやなくて支援しないと難しいところがあります。

そうしたときに、何か教えるっていうことじゃなくて、違った形で学びにフォーカスした分、実は先生の指導性というか、支援の仕方ってすごく高度になるんですね。逆に言うと。だから、保育園とか幼稚園とか行ったらよう分かりますと思いますが、園庭とかの環境自体がすごく大きいわけですよ。直接的な指導性じゃなくて、間接的な指導性っていったものがすごく大事になってきます。だから、それはなかなか一朝一夕にできるものでもないし、まず環境を整え

### 授業をめぐる二項対立図式の落とし穴

- どれだけ「学び」に光が当たっても、大人の責任を放棄しない限りは、「教えること」に限らず、教師、あるいは子どもの学びと成長を支援する他者の仕事はなくなりしない。「授業から学びへ」という言葉を使っている、教育関係者であれば、教えることや教師の仕事が完全になくなるという意味で使ってはいないだろう。「学び」に光が当たることで、より縁の下の力持ちのような形で教師の指導性は見えにくくなっていくが、しかし確かに存在はしている。
- そうした見えにくくなっていく部分にもしっかりと光を当てておかないと、特に教育言説が教育関係者の内輪だけでなく社会全体に開かれたときに、言葉を文字通り受け取って、子どもに任せさえすれば学べるんだ、教師はいらないのではないかといった誤解を生み、それを文字通り実践するような取り組みや改革が生まれかねない。

るということはそんな簡単にはできないし。さらに言うと、先生のやっぱ見る目っていったものがないと支援できないというところがあります。

ただ、学びに光が当たるからといって、縁の下の力持ちになるような、そういったこの先生の見えないアートというか、その部分にちゃんと光を当ててないと、世の中の人たちは子どもだけで何かやってるように見えるから。だから、先生なんていらなくていいんじゃないですかみたいな話になりかねないところがあります。

あるいは、経験が浅かったら勘違いする。ほったらかしとったらいいんじゃないかと。特に、例えば公開研究会とか行かれると思いますけれども、2月の子どもの姿と思ってなかったらいかんわけですよ。5月は違いますよ。あるいは6年生の姿と思ってなかったらいかん。公開研究会において、2月の姿だから自分たちで動いている。自分たちで学んでいる。だから、そういうようなところをやっぱり補って、見えない先生のいろんな土づくりだとか、そういったところに目を向けていかないと、結果として望むような姿は生まれてこないというふうなことは大事かなと思います。

もうひとつ言いますと、われわれ、授業をつくるというふうなときに何を押さえておかないとあかんのかということではいいますと、一つ考えたいのは、それこそ授業づくりの不易を追及するってことが主体的で対話的で深い学びということにつながってくるわけですけども。では、主体的で対話的で深い学びってどんなふうな姿なのかですね。授業において。どうですか。イメージ湧きますか？ 例えば、主体的で対話的に学んで子どもたちってどんなんですか。主体的で対話的。例えば、グループ学習とか、4人でグループで机寄せ合って、コロナ以前の風景かもしれないですけど、コロナ以後でも今でもやっていますけど。ホワイトボードなり何なり、今やったらタブレットでもいいですよ。真ん中に置いて、『ごんぎつね』やったら『ごんぎつね』の読み取り。最後、兵十が「ごん、おまえだったのか」とかっていうふうには、火縄

銃を落とす場面とかね。その最後の場面の本文があつて、それをみんなで見ながら頭突き合わせて、ああでもない、こうでもないとかっていうふうには線とか引きながら、それこそ、腰浮かせて。頭突き合わせて何かやってると。この姿見たときに、先生がたは、これは主体的やし対話的やなと思うと思うんです、大抵ね。

だけど、そこでポイントなのは、そのときに子どもたちの目線の先に何かがあるかです。もちろん教師ではないですね。だからといって、子どもたちの目線の先にあるのは仲間ですか。そうでもないと思います。何か。それは教材ではないですか。つまり、主体的で対話的な学びの正体というのは、教材を介して、まなざし。視線。これを共有している姿。まなざしを共有している姿ってことです。だから、同じものを見ながら一緒に頭、突き合わせてる。その瞬間。教師が教えるか、子ども達に任せて引くかみたいな、ちゃちい話じゃないんです。子どもたちが必死になってみんなで一つのものに没入している瞬間。教材、広く言うと「材」ですね。学習材とか主題とか問いを介して、みんなで学び合ってる、材を介して、みんなでまなざしを共有し合ってる瞬間というのは、教師なんてアウトオブ眼中です。

だから、主体的・対話的な学びの正体というのはそれは何かっていうと、教師アウトオブ眼中状態をどう作るか。そのためには必ず教材がなかったら駄目です。だから、思考なんていうのは、何かについての思考でしかないのです。だから、対象ないところで思考なんて起こりません。だけど、最近なんかよく聞くのは、結局、深い学びとは何ですかとかいうふうなことで、この入り口と出口すっ飛ばして、授業中のプロセスだけ見ようとするんです。何かについての思考なんですよ。

だから、教材。何について、どんな問いを考えるのみたいな教材研究なかったらあかんし。そのときに子どもたちの現状がこうで、その先に授業とか単元通してこういうふうな姿に持っていきたい。入り口と出口が、ここを先生がしっかり考え抜いてないところでふらふらと



プロセスだけ見てたって何も分からないいうところがあります。だから、ちゃんとその辺り、何とかな学びとかっていうふうに言ったときに、つまるところ、学ぶということは何かについて学ぶことであると。そのときにやっぱ教材といかに出会わせ、そこに没入させて、もっと言うと没入した結果、おいしいもの食べた結果もっとくれというふうになったら OK なわけです。授業、もっと言ったら、学ぶこと支援することの基本はそのようなことです。いかに学習者が教材、その学ぶものですね。対象と出会って没入して、さらにその食べた先にもっとくれというふうに言う。これ以上でも以下でもないということですね。

それは2項関係じゃないです。教師と子どもじゃないです。授業っていうのは学ぶこと一般もそうですけども、教師と子ども、子どもと子どもの一般的なコミュニケーションではありません。そうじゃなくて、どこまで行ったら教材を介して、あるいは材を介した教師と子ども、子どもと子どものコミュニケーション。これが授業なわけです。だから、2項関係じゃなくて、3項関係で考える。結論を言ってしまうと、共同注視関係になっているかどうかは何より大事です。これは幼児教育とか特別支援教育であれば共同注視関係、同じものともに見る、カウンター横並び関係ですけども、これが大事ということはよく言われます。これは学ぶこと全てに通じる。共同注視関係。これは大学のゼミも一緒です。同じテキストを見て一緒に読み合う。だから、先行研究者っていったものと、やっぱりフルフラットになっていくというところですね。どんな状況であっても学ぶことの基本は共同注視関係ができていくかどうかいうところになります。

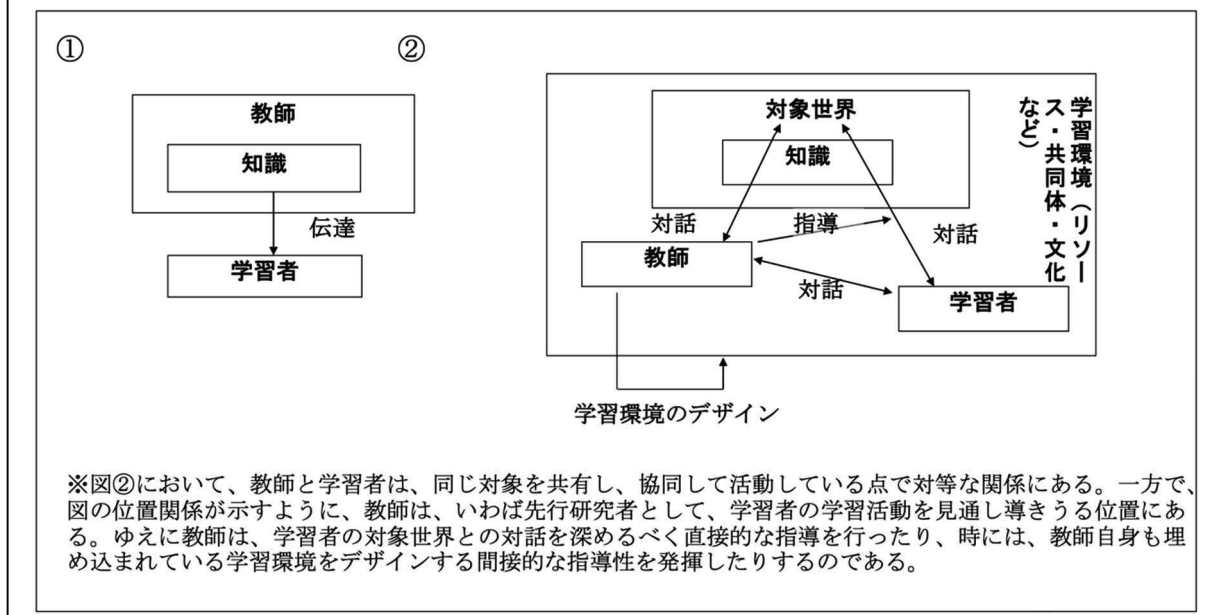
結局、さっきから言ってますように、学ぶことっていうのは、いかに材と出会わせてそこに没入させていくのか。これがまず基本。なんだけれども、多くの授業において、例えば新しい授業とかって言われているような学び合いとかっていうのは材と向き合っていないこと結構ありますね、結局。何となく話し合ってるだけい

うことです。根拠がない。テキストに戻ってない。逆に、多くのその古いと言われている授業は何かっていうと、1番目みたいな関係です。

要は、教師を付度する関係になっていると。だから、国語とかは分かりやすいですけど、『ごんぎつね』やったら『ごんぎつね』について教材研究しましたと。その結果、持った先生の解釈を子どもたちに押し付けるか、さもなくば付度させるかどっちかです。だから、その証拠に何が起こるかという、結局、ロの字であろうがコの字であろうが、全部先生のほうにもう意見が集中する。だから、みんなに向けてしゃべりなさいとか言うでしょ。あれは権力者である先生のほうに全部集中する。なんでかという、結局のところ、先生の胸の内にある答えを答えたもん勝ちやというふうに思ってるからです。知らず知らずのうちに子どもたち当ててる時、『ごんぎつね』の最後の場面、どう思った。こっくりしたごんの気持ちってどうかなみたいなこと聞いていくときに、なるほど、そういう解釈もあるね。それもね。それ！って具合に、先生のに近いような解釈言ったら指名が終わったら付度しないといけなくなっていくようなことを子ども学んじやうわけですね。

だから、多くの授業は付度をしちゃうんですね、これに対して、2番目の関係、何かっていうと、材を介して教師と子どもと一緒に学び合ってる。『ごんぎつね』もそうですし、それこそ、国語とかよく分かりますけども。完璧に正解の読みなんて実はないんです。より妥当な読みとか深い読みはあります。しかし、テキストっていうのは、その人なりに読めるものです。正解があるわけではありません。自然事象も同じです。だから、電流っていうのは輪ができたらくよとか思っても、でも、案外、小学校3年生とか4年生って素直ですね。ほんまにだから、こんなぐちゃぐちゃっていうふうにしてたりとか。まだ脚立とか大きかったりしたらこんな、ほんとうにつくかなみたいな。体力、なくなっちゃうんじゃないとか、やっぱり思っちゃうんですよ。どんなに賢い子でも。だから、同じもの見て、先生かって結局、この水道の蛇

図. 「真正の学習」における教室の関係構造（出典：石井英真『現代アメリカにおける学力形成論の展開—スタンダードに基づくカリキュラムの設計』東信堂、2011年、183頁。）



口とかにこれ、付けたら、これ、ほんとうに電気、つくかなとか。未知のものはたくさんあるわけです。

だから、要は、子どもたちがちゃんと対象世界、材と向かい合っているかどうかということ重要です。『ごんぎつね』とかで言うと、3項関係みたいなもんですから、黒板とかにそうやってタブレットとかで映してもいいですけども。その場面、読み取りたい場面があって、これ、みんなどう思うというふうに聞くと。なるほど、そうか。それでそれを読んでいるとき、子どもたちはたまに、もう先生よりももっと深く読むときあるんですよ。ほんなら「ありがとう。ほんま先生言うことないわ」というので、そんで終わったらいいんですね。

だけど大抵の場合、この図の関係が表しているように要は先生、教材研究、やっていますから、先行研究者みたいに斜め前ぐらいにおるんですね。だから、そうすると、もう一步読みが浅いなっていうふうに思ったときにどうするか。じゃあ、こういうふうに解釈したらいいんだよっていうふうに言いたくなるわけですが、その前にもう一步、大体、解釈が違うってというのは何かというと読み飛ばしてるんですよ。同じものを見たときに見えるものが違う。これ

がプロとアマの違いです。教材研究やってなんで深くなるかっていうと、読み飛ばしがなくなってるからです。だから、そうするとあらためてこの解釈って結局、この一文読めてないんじゃないということに気付いたならば、なるほど、でも、この一文、みんな、読めてる？っていう指さしをする。そしたら、それ、関係するんですかみたいだね。そこで子どもたち考え始める。まだまだ甘いね、ここ皆さん読んでないよというのが、これが「ゆさぶり」です。だから、分かったつもりと思うなよというところですね。ただ、そういうふうに3項関係、対象世界を介して子どもと教師は横並び関係なんですよ、実はね。だけど、先生は教材研究、やっていますから、ちょっと斜め前におるんですね。なので、いろいろと支援できたりとかゆさぶれたりするということです。だから、つまるところ、こういうふうに材を介して横並び関係。カウンター横並び関係。になれてるかなっていうことをちょっと考えてほしいと思います。

2番目は確かに理想みたいに思われるかもしれませんが、日常の中で生まれてるっていうふうな認識を持ったほうがいいと思います。先生が授業しているときに、なるほどとか。あの子、こんなこと考えんの、面白いなとかって

いうふうに、特に小学校とかやったら感じられることもあると思うんですね。その瞬間は、要は、子どもは教師を学び超えてるんですよ。日々、実は授業している中で、2番目のような一緒にその対象世界とか材と一緒に考え合ってる瞬間って、ちょいちょい生まれてるんです。だから、そこに先生が気付けるかどうかということです。気が付くと、大体、一緒に考え合ってる瞬間っていうのは教室の中でまさにこういうポジションにいるでしょ。正面じゃなくて教師の斜め前ぐらいに先生動いてるはずですよ。だから、そういうふうに考えていくといいのかなと思いますね。

それで言いますと、本当に授業とか学びを支援するということのポイント。それはその教科のうまみを得られる材。できるだけ本物の生のそれを考え抜くこと。これが教材研究です。教科書とかっていうのも冷えて固まった知識ですから、躍動感がないんですね。材と子どもたちのいい出会いを組織する。これが導入。それで子どもとともに横並びで材と対話して、時には斜め関係に立ってゆさぶったりすると。これ、発問とゆさぶりというところになりますよね。グループ学習にしたって、個別最適で各自でやりますというときに、各自やってるからこそ、それを結び付けたいとかゆさぶったりすることってすごく大事になってくると思います。学びは子どもたちとか個人の中で結構完結して、そこそこ深くいくかもしれません。しかし、やっぱり限界がある。だから、それで分かったつもりと思うなよと。やっぱり他者性というか。学んでいるときに自分の枠に陥りがちですから、そこを解きほぐす上でもやっぱり横につないでいくということが大事になってきますよね。ただ、ファシリテーションとかっていうふうな言葉もありますけれども、ファシリテーションってただ単に、いろんなものを生かしていくってだけじゃなくて、時にはちょっと挑発することも重要です。そうでなかったらやっぱり人間、伸びないところがありますね。だから、発問というゆさぶりっていうことがあります。

さらにそうやって挑発とかもされたりして

いくと、もう自分たちが分かったつもりっていうことが分かってなかったかもっていう、そういう気付きが出てきたりするわけですね。そうすると、すき、突かれた感じで、自分って分かってなかったかもしれんっていう無知の知が、やっぱり次への学びの追求心を生みだしてくると思います。だから、先生がたからすると、単に分かって終わりというんじゃないくて、その先にもやもやが生まれてくるような授業が一番いい。それこそ先生がたからして、日常生活もそうじゃないですか。先生がたがよっしゃと思う瞬間っていうのは、まだやめたくないとか。もうあつという間、もう45分も終わったんとか。じゃあ、これはどうなってるのかなと。こんなこともやりたい。大人が言ってたあれってこういうことやったんか。ああ分かった、分かった。そういうことか。これって授業で学んだことと関係あるんちゃうとかっていうふうに、授業が終わった後もずっと黙々となんか書いてみたりとか。だから、そういうふうな姿を見たときに先生がたはなんか良かったなと思うと思うんです。これがまさに学ぶことへの導入になっていくということですね。

食べた後にもっとくれみたいな発想です。授業とは授業で終わるんじゃないくて学びへの導入。授業は何のためにするかっていうと、ある種、触発なんですよ。授業をすることによって授業の外側の休み時間であるとか学校の外側の生活の在り方が変わってくる。これが一番大事なことです。特にICT活用ってことでいうと、そうやって授業っていったのがむしろ問題提起の場として機能し得る。それで各自が調べてくることもあるわけですが、結局。もやもやするけど楽しい授業やないですけども、これどうかなっていうことで問いで終わってもいいわけです。主体性っていうのは、実は入り口よりも出口の主体性の方が重要。学んだ先に生まれてくる、なんでかなとか、はてなとか。あるいは、もっとやりたい。その気持ちが重要。それに答えてくれるような環境っていったものが教室空間が複数あったならば、対面が終わっても授業が終わっても学びは終わらないって子たち

でやれるわけです。昔やったら日記であるとか、あるいは、学級通信みたいな形で紙面上の討論で紙上討論でやってたと思います。それをタブレット上でやっていくっていうふうな発想は実際されてるんじゃないですかね。そんなふうなことも起こってくるというふうに思います。その時に、それで子どもたちが自分で学んでいてこんなこと調べてきてこんなふうなまとめてきたっていうふうなことを、たまに学校の授業対面の場でみんなでも共有して喜び合うことによって、その子の個性も生きてきますよね。だから、そんな形で展開していくことが重要なことだと思います。

共同注視関係ってこと言いましたけど、3項関係ね。これは実は深さとか対話的とか主体的っていうこととすごく関わってきます。結局、深い学びって何かっていうとね、要は中身があるかどうかってことなんです。中身があるかどうかっていうのはちゃんと材と向き合っているかどうか。この1点にかかってきます。だから、その材選び。問いとか課題がどうなのかということ、ここやっぱり、ちゃんと先生のほうで考え抜くこと。どんなに自習をやったところで自習するテキストが貧弱であれば、学びは貧弱になります。良質のテキストであるとか、あるいは良質の課題っていったものはすごく

重要になってくる。だからそう思うと、深さっていったものは、結局、子どもたちが学ぶべき中身。その中身にちゃんと正対できているかどうかということになります。だから、共同注視関係が成立しているってことは、実は深い学びへの条件。

もうひとつ、このオンラインとかでいいますと、同じ画面見ながらブレイクアウトとかもするやないですか。今かって、実は、これある意味共同注視かもしれませんよ。同じスライド見て、みんな、それぞれの場所で学ぶ。しかし、これ、対面と何、違うか分かりますか。

これ対面だったら隣に具体的に人がいるんですよ。だから、会議とか見てたらありますよね。会議がオンライン会議っていうのは、オンライン会議の終わりは縁の切れ目なんです。しかし、もし対面であれば会議やった後に終わったとかっていうふうに横、向きますよね。何かしゃべる。これがボンドというか、人と人とのつながりを作るわけです。共同注視関係って実は自己肯定感とか、人と人とのつながりに関係するとよく言われます。基本的にそっちの文脈なんです。だから、それ何かっていうと、同じもの見て語り合うからそこに共同性が発生するということになります。だから、実はオンラインっていうのは同じもの、見てるんだけど、

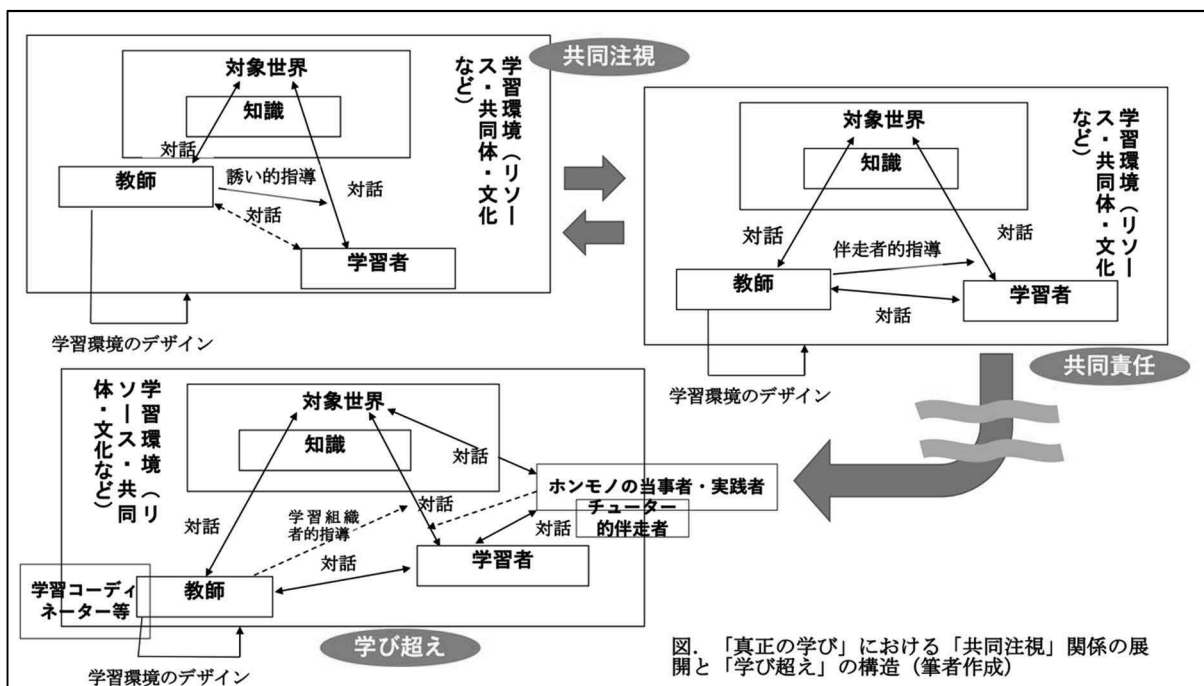


図. 「真正の学び」における「共同注視」関係の展開と「学び超え」の構造（筆者作成）

共同注視っていうふうな横のこのつながりが、ここんところが実はないというところが弱いと思うんですね。だから、横顔とか背中から学びづらいつてことになります。

もうひとつ、ここに書きましたけども主体性ということと関係します。主体的とはどういうことかというふうなこと。主体性が育つとはどういうことかということを考えてときに、要は、授業の最初とか単元の最初とかっていうの、割と一番左上みたいな感じ。その対象世界とかこれ、先生が教材研究やって、こういうのはどうですかっていうふうに結構いざなうわけですね。面白いよ、これ、みたいな形で。それでだんだん子どもたちが食い付いていったりして、一緒にその問いとか課題とかそういったものを追究し始めるようになってくると右側、同じもの見て結構横並びになってきます。これ、共同注視か共同責任関係。だから、その同じものや問題を解決する責任を一緒に担っている関係ですね。授業を一緒に作っていく関係みたいな感じですよ。そうなるのと、たまにさっき言った話ね。なるほどなっていうふうに先生がうなる瞬間出てくるわけですよ。だから、それ、学び超え。

しかし、多くの場合、教科のときには学び超えがずっと起こってるってことはあんまないんです。やっぱり教材とかもそうですし、学ぶ内容とかかかって、自由進度学習とかありますけど、それにしたって教材とかそういったものの大枠は先生決めるわけですよ、結局。その先を自分で学んでいくということもあるかもしれませんがね。だから、やっぱりかなりその辺り、枠の部分っていうものは逆に先生が責任を持ってやっていくところがあります。

しかし、総合とか特活になってくるとどうかというと、対象世界っていうものが現実の目の前の地域とか社会問題とかになってくると。あるいは、その研究上の問題かもしれませんね。そのときに先生にとっても、京都やったら京都の課題みたいなことに追究しますよというふうないったとき、先生も未知の関係なんですよ。だから、子どもたちと一緒に先生も教材研

究とかいろいろ事前リサーチとかもしますから、斜め前におるかもしれませんが、実際にその社会問題と挑戦していくときっていうのは、その京都市であれば京都市の問題に本気で挑戦している世の中の人いるわけですよ。これが本物の当事者、実践者です。役場の人もおるかもしれませんし、NPO 法人の人もいるかもしれません。その本物の他者みたいなものがいて、その人たちと子どもたちが一緒に学んでいったりすると、子どもたちはその本物の他者との間に共同注視関係を見だし始めます。学校の中での教師と学習者の共同注視関係から、だんだん本物の当事者とか実践者との間の共同注視関係に展開すると、この問題を一生じゃないけどかなり時間かけて、本気で考えている大人たちがいる。あるいは先輩たちがいる。ほな、その人たちの横顔とか背中、見ながら学び始めるんです、子どもたちが。そうしたら、学校の授業とか学校そっちのけで学校外側の活動にもうどんどん参画していくってことも生まれてくると思います。まさに飛び出し坊やみたいな、飛び出しお嬢ちゃんみたいな形ですね。飛び出していっちゃうみたいな。

ただ、そのときに例えば高校の探究とかやったりすると、地域の課題とかとどういうふうに出会わせていくのかってときに、いろいろコーディネーターがいたりとか。それで先生をサポートする。あとはSSHとかねSGHもそうですけども、大学の研究っていうときに一つポイントになってくるのは、本物の他者っていうのは暇じゃない。だから、日常的な伴走はまず先生がやらざるを得ない。それ大事。それは中身というよりも学びへの伴走。

もうひとつ中身の専門性に対して伴走するっていうふうないったときに、例えば大学であれば大学院生とかのチューターが結構有効ですよ。だから、そういうふうな総合とかなってくると割といろんな人たちの助けを借りながら、子どもたちが学校の外側に共同注視関係を作って学び超えていくってことが起こります。だから、これこそが本当に主体的ということではないですかってことですよ。もともとそれこそ

子どもたちってというのは多かれ少なかれ、何か積極的にやりたいというふうな気持ちを持っておるといふところがあります。でも、本当の意味で学校教育とかで育てていきたい主体性。持続的に本当に学び続けることにつながっていく主体性というのは、これは自習する力っていうふうなこと以上に、それも大事だけでも。だけど、自分の中でこの問題は面白いとかっていうふうにやっぱり追究したい課題とか対象世界。そことの出会いが重要なわけですね、結局。だから、そうなるとその本物の他者みたいなものとともに学んでいくということに、活動していくということになってくると学校を超えていきますよと。これこそ本当のエージェンシーとかっていうふうなものちゃいますかということですよ。

だから、主体性というふうなものも、これもうグラデーション。だから、ここ、詳しくは言いませんけれども、これだから、教科で全部無理ですよ。教科はせいぜい学び超えぐらいまで。自分で課題を作って、それで追究していくって総合とかっていうのは、この自立、人間的成熟、この辺。キャリア教育に関係します。さらに特活っていったものは、自分たちで自分のこのルールメイキングとかも最近、言われてますけれどもね。でもルールメイキングっていうのも、あれは学校の本当に自治組織を作るところまで行かないとほんまの自治にならないと僕は思います。一過性になります。だから、そういうふうに分団の集団、作り変えるっていうふうなところ、社会を作り変えるというところまで行くところ自治ですね。これまさにエージェンシーということになってきます。

だから、そういうふうに分団カリキュラムでもともと日本って全人教育ですから、教科だけじゃなくて総合・特活ね。道徳も含めてかもしれません。トータルに全人教育、やってるんですよ。だから、主体性と一言で言いますが、こういうふうに分団グラデーションがありますよと。カリキュラム全体でどう分団に育っていくのか。こういうことが大事になってくるかなと思います。すみません。あと5分ほどの

で、ICTの日常化の視点とかいろいろ書いてますのでまた見ておいていただけたらと思います。目標を見失ったらあきませんよということですよ。結局、何のためのICTかというふうなこととか、その辺を見失いがちですから。これは何とかアプリの授業ですかみたいなこともやっぱり見たりするんでね。だから、さっきの話、学びがそこにあるかどうかってことを見極めるときには動詞に注目しましょうよみたいなことを書いていたりします。

1人1台っていうふうに分団のときに、付度する関係って言いましたけど、ちょっと注意が必要なのは、教室って一対多のように見えてそうじゃないです。多くの場合。特に中高。一対一、教師と子どもの一対一の関係の束ってことに結構なっています。タブレットとかで一覧で見えるでしょ。個別最適分団なので一人一人に丁寧に分団指導でもしようと思ったら、これは大変なんですよ。子どものためになりません。すぐピコンピコンとかって分団のつまずいてますとかって分団に言われたらすぐ行っちゃう。これ、ほんま一呼吸もあつたら子どもたち同士の分団で学び合分団が起こつたりするわけですよ。実は教室って分団のは縦系関係ばかりなつて、横系が通つてないことがかなりあります。鵜飼分団の関係みたいになつてから。だから、むしろタブレットって分団の分団で子ども主語で考えていくつちゅうんやつたら、分団指導を先生が丁寧にやつて個別指導で救うじゃなくて、むしろ子どもたちに分団指導とかその後の授業の展開をゆだねる。誰が何に書いてるかとか、何考えてるか分かつたりするわけですから、そこから子どもたちに分団指導をゆだねていって、誰の考え分団聞いてみたいみたいなことを自分たちで考えていけるような、そういう分団に横系通分団していくような。子どもたち同士の。そういう分団のことが大事になってくるんじゃないかなと思います。スライドのこの辺りのところは子ども主語やうんぬんとかですね。真正の学びとか。いろいろと学力の質の話とかも書いてますので、また後で見分団おいていただけたらと思います。

最後に個別最適な学びということを考えるときに、個別最適な学びとか指導の個別化とか、学習の個性化って何やねんというふうなことを整理して終わろうと思います。個別化と個性化はさっき言いましたように、個別化は垂直軸に大体対応することが多いです。個性化という

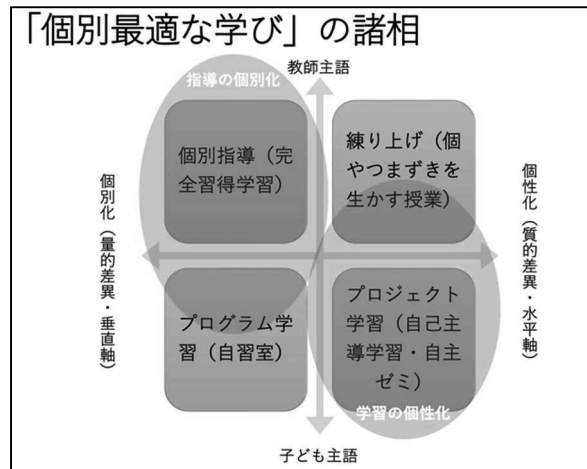
**子ども主語の授業を追求しても、教師主語の授業研究は重要**

- 子ども主語の授業とは、学びの所有権が子どもたちにある授業（授業における参加と自治の問題）。ゆだねられる部分はゆだねられ、授業の先により広く深く学び始める姿が見られる授業。
- 子ども主語で考えるとは、「それ本人に聞いてみたら」を意識すること（子どもの意見表明権と参加権の尊重）。授業における動詞の主語を子どもにしてみて考えること。子どもと同じものをまなざし、共同注視の先に共同責任の関係を構築する。
- 「子ども主語=子どもに選ばせる」ではない。主体的とはどういうことか（「それは自分で、自分たちで考えることだ」という感覚）。自分で考える、作る、決めることこそ（自己責任とは違う厳しさ）。
- 「子ども主語」と「教師（現場）主語」は相似形。

のは水平軸です。目標まで個別化するのか。あるいは、方法までぐらいで止めるのかとかいろいろ議論があるんです。いくつか論点あります。そのときに、この大きく言うと、個別化と個性化。量的な違い、できるできないか。あるいは質的な違い、その子なりの持ち味かっていうことと。もうひとつ、教師主語と子ども主語というふうにその二つの軸で考えてみるとよく分かると思います。よく個別最適というふうにいったときに、最初。個別最適化されたというときにそれは AI ドリルのイメージが強かったんですよ。もう自分たちで勝手に進めていったらいいやみたいな形ですね。ある意味、子ども主語なんですけど。これって大人の側の責任放棄が起こるかもしれません。結局、それぞれ自由にもうドリルみたいなんで進めていくのでそんで教科学習 OK ですよみたいなことになっちゃったら、ちょっと格差も広がっちゃうじゃないと。だから、プログラム学習じゃなくて一定の学力をやっぱり教師の責任でもって、そこへの到達のための支援はしっかりせないかんというので、個別指導の形で教師の役割っていったものをちゃんと位置付けて、完全習得学習を目指す。これが指導の個別化だと思います。だから、教師主語の責任を手放さない。

しかし、それだけだと個別最適っていうことの可能性を実現したことになるのかと。さっきの話、自分たちで学んで授業が終わっても学び

続けるということが出来るわけでしょう。そうすると、個別化やなくて個性化っていうふうなことをもっと大事にしたほうがいいじゃないか



と。個性化っていうとさっきも言いましたように、じゃあ、練り上げ型の授業とかっていうのは一人一人のつまずきとかを生かしていくって形で、ある種、個性化の様相はあるんですよ。クラス全体で一斉じゃなくて、それぞれの良さをつなぎ合わせながらと。だいたい先生のアート、ありますけど。

でも、それやったら教師主語過ぎると。子どもたちが自分たちで学び続けていくってことっていうと、もっと子ども主語で個性化を考えたほうが良い。そうすると、プロジェクト学習みたいな形で大きな総合とか部活とかもそうです、ある意味。自分たちでここに向けて頑張るぞみたいなことを、自分たちでプロジェクトとして文化祭もそうですね、決めて。そしたら各自で、自分で自主トレもするし、自主ゼミしてみんなで集まったりするという形で総合とかを考えたらいいいですけども。あるいは、図工での学びとか。共同制作とか考えたらいいいんですが、フレキシブルに自主ゼミやら自主トレしながら進めていく。これが学習の個性化ということですね。

だから、こういうふう捉えてみるとぐるりと、もともと AI ドリルから始まって、ぐるりと子ども主語の個性化された学びというふうな辺りで、それ、指導の個別化と学習の個性化。この辺が今までの日本の授業とかの良さも生かしながら、展開していくときにポイントなんじ

やないというふうなことかなと思います。

だから、それこそ単元単位で授業を作っていくっていうふうにしたときには、その個別指導の側面みたいなものっていったものがある種、指導の個別化みたいなものっていったものは組み込まれると思いますし。パフォーマンス課題とかもそうですけども、大きめの課題を基にみんなで作っていくような、ある種、プロジェクト型の学習みたいなものを、社会にしたって英語とかにしてもそうですしね。理科もそう、割と単元単位でそういう素材っていうのは、今、教科書の中にも結構入ってきていると思うんですよね。だから、それの中で自主ゼミとか自主トレとかっていうふうにフレキシブルな感じでやっていくっていうふうなところで、学習の個性化ということにつながってくるかなと思います。

以上で終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。